Momoyama Gakuin University

〔共同研究：社会福祉方法論の研究〕
研究ノート

ソーシャルワーカーになっていくための過程と課題

——大学におけるソーシャルワーカーの教育と課題を中心にして——

岩　田　泰　夫*

目　次

はじめに
1章　ソーシャルワーカーになっていくための大学における学習課題と過程
2章　社会福祉現場でのソーシャルワーカーになるための学習課題と過程
1)　社会福祉現場の業務内容に関する知識と理解
2)　社会福祉現場での実践と知識を関係づけるなどの課題
3)　自分なりの特性を生かした社会福祉実践がなされる課題
3章　大学における福祉教育の課題
4章　社会福祉援助技術総論での試み
5章　社会福祉援助技術演習での試み
6章　社会福祉援助技術実習での試み
7章　ソーシャルワーカーになるための課題と方法
1)　回復者が有給の職員になるための課題
2)　ソーシャルワーカーになるための課題
3)　両者の課題の異同
おわりに

はじめに

社会福祉学などの実践の科学は，研究と教育，そして現場での実践の3者が一体となって進められる必要がある。ソーシャルワークの研究とソーシャルワーカーの教育，そしてソーシャルワーク実践が相互に絡み合い一体となって進められる必要があるということである。

例えば，社会福祉現場においては，ソーシャルワーカーは，ソーシャルワーク実践を行うとともに，自分たちのソーシャルワーク実践を研究し，理論化する活動をも同時に行い，なおかつ自分たちの現任訓練を含む教育にも従事する必要がある，ということである。

また，大学などの研究と教育のための機関においても，研究と教育，そして現場におけるソーシャルワーク実践を一体化させて進めていく必要がある[1)]。

したがって，大学の教育もまた，ソーシャルワークの研究を行うとともに，それをもとにして教育を行い，そしてまた教育をもとにして研究を行う。さらにまた，研究では，現場におけるソーシャルワーク実践を検討し理論化することによって進め，また同時に研究の成果である理論は，現場のソーシャルワーク実践によって検証していくのである。また，大学の教育の評価は，社会福祉現場で業務を行うそこの大学を卒業した学生を評価することによってなされたり，社会福祉現場のソーシャルワーカーの教育への従事などによって評価される，というようにである。

このように，それぞれの機関は，それぞれの機関の目的と性格によって3者のどれかに重心を置きつつも，ソーシャルワークの研究とソーシャルワーカー教育，ソーシャルワーク実践の3者を相互に絡み合わせながら活動を展開しているにちがいない。

「私の場合は」と言うと，ソーシャルワーク

* 本学社会学部
1) ヤスパース『大学の理念』。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

を実践するソーシャルワーカーに焦点を置いて教育と研究にかかわってきたように思う[2)]。

例えば，ソーシャルワークは価値と知識，技術の3つの要素によって構成されると言われる。また，ソーシャルワーカーには3つのH（HANDとHEAD, HEART）が必要であると言われる。両者を比較すれば，私は，ソーシャルワーカーに必要な要素である3つのH（HANDとHEAD, HEART）に関心をもってきたように思う[2)]。

ここでも，ソーシャルワーカーになっていく過程について検討し，その上でその過程における大学での社会福祉教育における幾つかの試みを述べてみたい。

まず，ソーシャルワーカーになっていく過程について検討する。

なお，この検討は以下のような2種類の個人的な経験に基づいている。

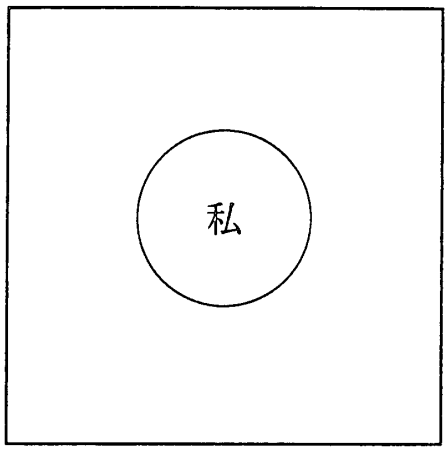
まず第1点は，私のソーシャルワーカーとしての歩みの経験の検討である。これは，次の2つの経験から成り立っている。まず第1は，大学に在学中に受けた社会福祉援助技術現場実習の経験である。第2は，保健所を場とする精神科領域でのソーシャルワーカーとしての経験である。

第2点は，ソーシャルワーカーになっていく過程を支援してきた経験に基づく検討である。これは，大きく分けて3つの経験からなる。第1は，保健所という現場で実習生を指導するソーシャルワーカーとしての経験である。第2は，大学で社会福祉教育を担当する教員としての経験である。第3は，現場で働くソーシャルワーカーの人々の研修や相談などにかかわってきた経験である。

第1点が，ソーシャルワーカーになるという目標に向かって歩いていく「学びの過程（プログラム）」の経験であるとすれば，第2点は，ソーシャルワーカーに一定程度なった立場からソーシャルワーカーになろうとする人々を支援し，自分の歩んできた道を再度振り返る「復習

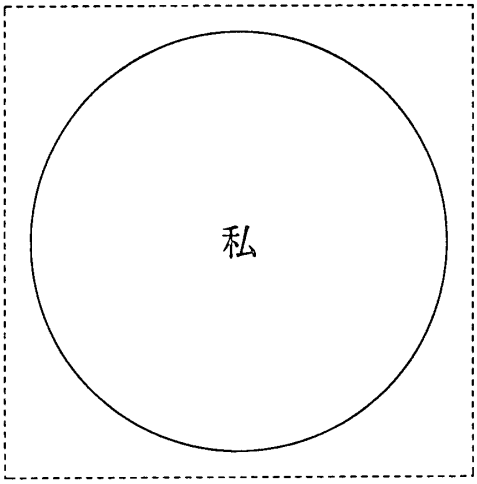
2）岡本民夫編『社会福祉援助技術総論』川島書店，1990年。

図1　ソーシャルワーカー



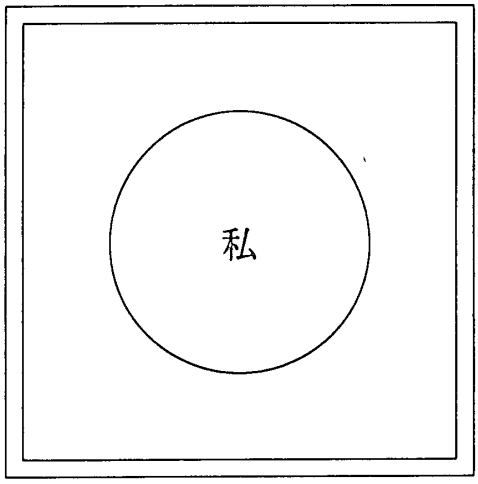
ソーシャルワーカーの服（三つのH）

図2　ボランティア



私が大きく，ボランティの服は小さく，なおかつうすくすけており，私が実現される。

図3　医　師

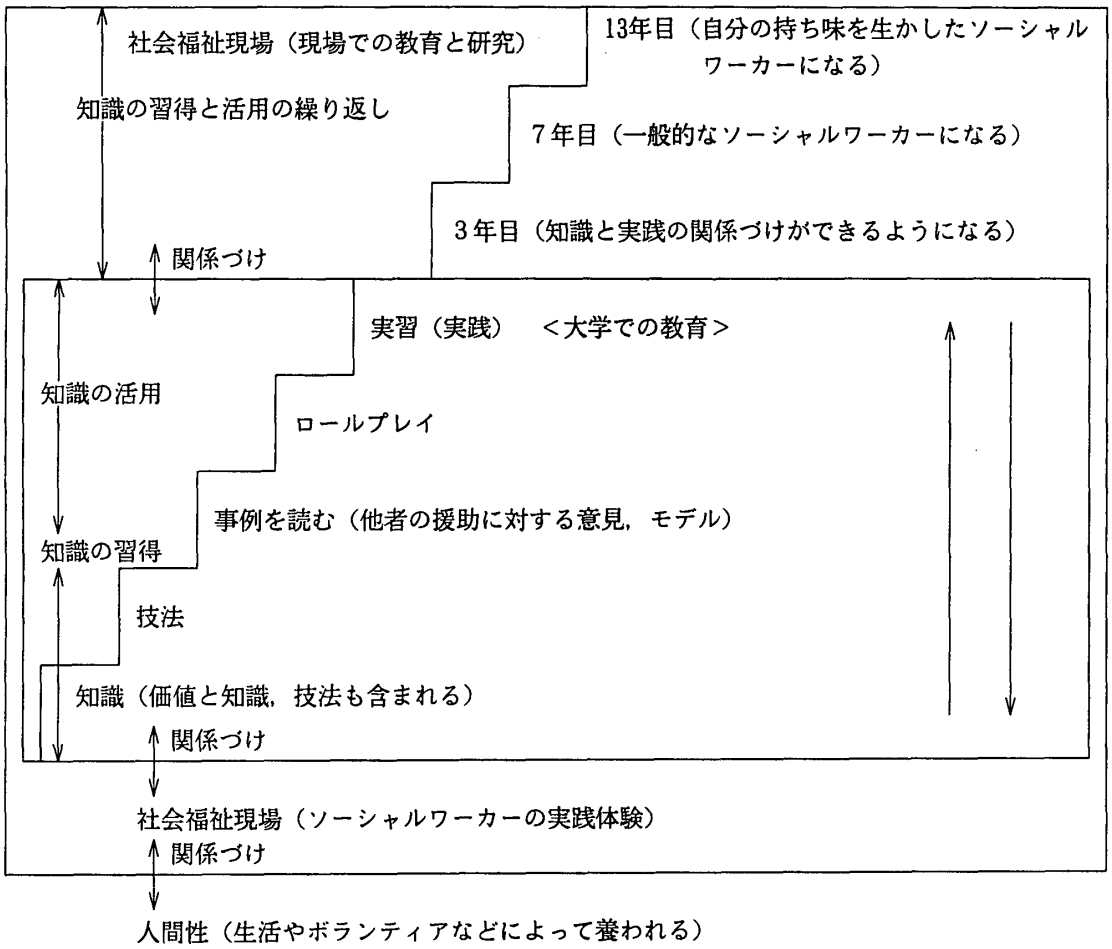


私は小さく，医師の服は大きくてしかも厚い。高い専門性が保たれ，私は医師の服の中にしまわれ隠されている。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

図4　ソーシャルワーカーになっていくための学習の課題と過程



の過程（マスター，生活史）」の経験である。

この「往路の過程」と「復路の過程」の2つの過程を経験することによって，「ソーシャルワーカーになるということと，その過程」を統一的に理解できるように思う。

それは，あたかも人生のプロセスを全うし，人生を理解できるかのようにである。曰く。第1歩で，生まれて，自分が自分を育てて，自分が育つ。第2歩で，その自分を育てた体験をもとにして自分の子どもを育てる。そして育児は育自を体験する。第3歩で，自分の子どもを育てた体験で自分の親の老いを育てる。第4歩で，自分の親の老いを育てた体験で自分の老いを育てる。自分が自分を育て，そして自分が自分を育てた体験をもとに他人を育てる。他人を育てた体験をもとにして自分を育てる。しかも，だんだん難しくなっていくようである。

そして次に，それらを踏まえつつ，大学における社会福祉教育における課題とそれにかかわる幾つかの試みを述べてみることにする。

1章　ソーシャルワーカーになっていくための大学における学習課題と過程

ソーシャルワーカーが3つのH（HAND とHEAD, HEART）を修得してソーシャルワーカーになっていくためには，大学での社会福祉教育をおえて，その後に現場での13年余の経験が必要であるといわれている[3]。

図1は，ソーシャルワーカーを示している。

3）岩田泰夫「ソーシャルワーカー実践の覚書」『ソーシャルワーク研究』12—4，1986年。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

私という人間がソーシャルワーカーという「専門性（服）」をまとっているのである。したがって，ソーシャルワーカーになるということは，図1における人間性を豊かにするとともに，「ソーシャルワーカー」という「服」を育み「着れる」必要がある。言うまでもなく，その服は，価値と知識と技術の糸によって編まれた服である。ボランティアでもなく，医師や介護福祉士でもなく，ソーシャルワーカーの価値と知識と技術の糸によって編まれた服である(図2・3)。

そして，ソーシャルワーカーがシーシャルワーカーになるためには，図4のような過程をたどる必要がある。

今，ここで，その図4を簡単に解説しておこう。

図4の一番外側の囲まれている枠には「人間性」がある。これが，一番外側にあってソーシャルワーカーの専門性を包んでいる。その次に囲んでいる枠は，「社会福祉現場」である。この社会福祉現場は，ソーシャルワーカーの実践での場であり，大学における知識教育の源である。学生は，社会福祉現場に出向いて，そして次のようなさまざまな体験を積み，学習する。まず第1は，社会福祉現場を知る。第2には，社会福祉現場と大学で習う知識などとを関係づけられるようになる。第3には，社会福祉の中でも自分が強く関心を持つ分野や領域を定められるようになる。第4には，自分がソーシャルワーカーになっていくための学習課題などを具体的に明らかにする。第5には，自分が習得した知識を用いて実践する，などである。

その次は，そのような社会福祉現場の枠の中に位置づけられてなされている大学での学習である。「知識」や「技法」の習得のステップを踏み，そしてその上で「事例を読む」「ロールプレイ」「実践実習」などを学ぶのである。そこまでが，大学におけるソーシャルワーカーになるための学習課題と過程である。

ここでの学習で重要なことは，以下の諸点である。まず第1点は，私がソーシャルワーカーという服を着ようとしていることをしっかりと自覚することである。第2点は，「その人間としての私」と「ソーシャルワーカーという服」との両者を関係づけていく課題である。第3点は，知識の習得と，それを踏まえた知識の活用である。第4点は，社会福祉現場と大学での学習との関係づけである。

その次には，ソーシャルワーカーになるための社会福祉現場における実践を基盤とした学習課題と過程が待っている。

以下は，シーシャルワーカーが，ソーシャルワーカーになっていくための過程と課題を示したものである。

1) 生活者としての課題

図1の「人間性」を豊かにするための学習である。生活者としての自分を育む「実習体験」であったり，人間や生活者としての生活体験を広げ豊かにするためのボランティアなどの活動である。

最近，生活が分化され社会化され，日常生活の中で「死」「誕生」「病気」などの生活や人生を体験する機会を失ってきているのできわめて重要な課題である。

2) 大学における社会福祉に関する知識の習得

社会福祉に関する知識の学習である。これには，社会福祉に関する知識を学ぶとともに，社会福祉に関連する知識を社会福祉のもとに組み立てなおしたり，社会福祉のもとに統合して学習される。

これらによって自分たちが学ぶ社会福祉学が何なのかをも知ることができる。

3) 社会福祉の実践の現実的な輪郭と構成を学ぶ

社会福祉に関する知識を学びつつ，「社会福祉援助技術現場実習体験を行う。

ここでの社会福祉援助技術現場実習は，「見学実習」「体験実習」「実践実習」などと命名される実習によって構成されている社会福祉援助技術現場実習の中の「見学実習」「体験実習」と言われる社会福祉援助技術現場実習である。

ここでは，社会福祉現場の事情などを知ると

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

ともに，社会福祉の実践を体験する。社会福祉現場がどのような場で，どのような人々が，どのような援助を展開しているのかを知ることができる。

社会福祉実践の現実的な輪郭が学ばれるとともに，自分が社会福祉コースを選択した動機を明確にしたり，学習上の課題などを具体的に実際的に学ぶことができる。

したがって，これらの「見学実習」「体験実習」などの社会福祉実習は，1年生や2年生の学年でなされるのが望ましい。

4) 技法などの習得

個々の事例を援助する場合に必要とされる援助モデルや技法の修得である。これは，上記の知識に含めて考えることができるが，ここでは，技法が知識の活用のための具体的な知識となるので便宜的に分離しておいた。

技法の習得は，事例をしっかり読めるようになってから習得するのがよかろう。事例を援助する枠組みの中で技法を活用することがより大切である。

そして，技法の習得によって自分の援助する事例の問題の定義も評価も処遇も変化することを学習する必要がある。

言わば，これは，自転車の乗り方についての学習である。

5) 社会福祉の知識などの活用の方法の習得

ここでの課題は，自分が学んできた社会福祉に関する知識などを活用する方法を学ぶ課題である。

知識の活用の方法の習得には，まず第1のステップとしては「事例を読む」方法がある。自分でない他のソーシャルワーカーが援助した事例を，知識を動員して事例を読み，理解し，評価するのである。自分なりに事例から資料を収集して，問題を定義し，評価し，他のＰＳＷの援助した事例と比較検討するのである。

上記にならえば，他者の自転車の乗り方に関して自分の有している知識を活用して意見などを述べる学習課題である。

図5　実習生の実習を構成する要素

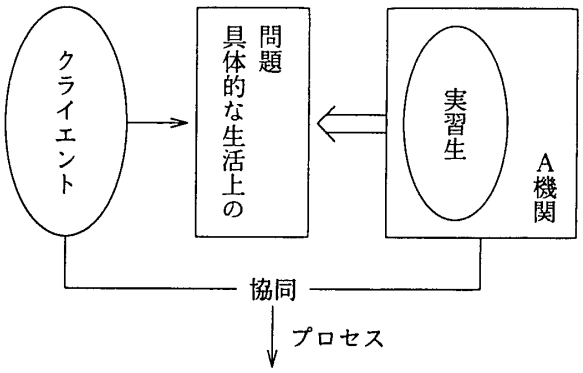
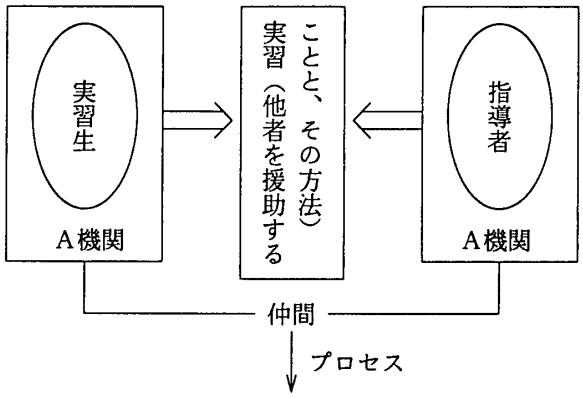


図6　指導者の実習生の指導を構成する要素



これに関しては，また後で具体的に検討する。

6) 社会福祉に関する実践実習

社会福祉に関する価値や知識，技法などに基づいて，自分なりに具体的に個別的に実践を試みてみる課題である。

ここでの課題は，自分が習得した知識に基づいてものをみたり，知識を具体的に活用して自分で事例を援助したり，技法などを実際に試みることである。

そして，自分たちが学んでいる社会福祉に関する知識が，現場の実践経験を普遍化したものである」ことを具体的に知るようになるとともに，自分なりの社会福祉に関する具体的で現実的な枠組みを持ちはじめ，自分なりのテーマを具体的に実践的に定め，学習を方向づけられるようになることである。

またまた，上記に習えば，これは自分で自転車に乗ってみる課題である。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

図7　自分が援助している事例の客観化

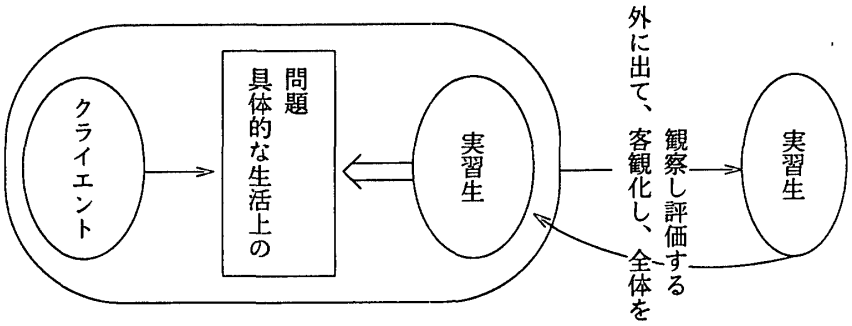
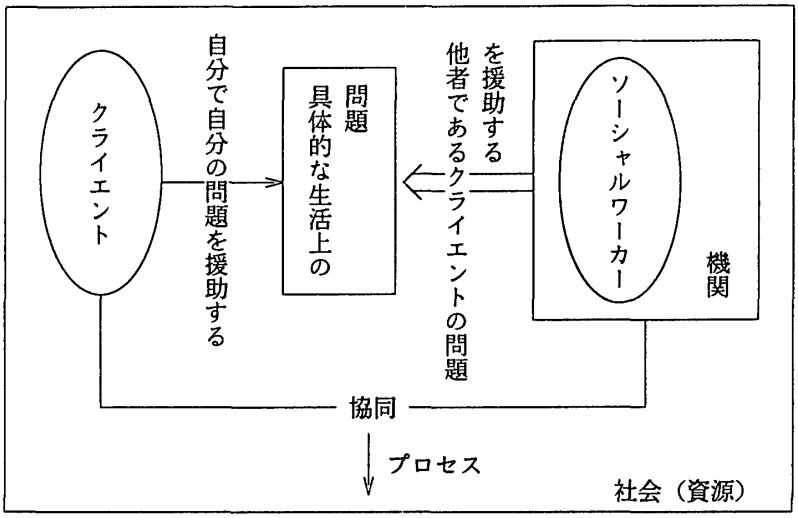


図8　ケースワークの構成要素



なお，ここでは，実習生は，以下の2点を体験することになる。まず第1は，クライエントなどの事例との体験である（図5）。第2が，社会福祉実習現場での指導者との体験である（図6）。

7）実践実習の記録化

ここでの課題は，自分が行った実践の記録化である。自分が習得した知識に基づいて実践し，しかもその事例を客観化し，整理し，意味づける課題である。5)の段階では，知識を活用して検討する事例は自分の援助している事例ではないので事例を客観化し，知識を活用しやすいが，それに対してここでは，自分の援助した事例を扱うので，上記に加えて一度自分と自分の援助実践を外に出し，「自分と自分がかかわる事例」を客観化する作業が必要とされる。自分と事例との間に何が起こっているのかを距離をおいて対象化し客観的に評価する課題が加わる。それを図示したのが，図7である。

8）自分の援助した事例の検討

そして，その上で，自分の援助した事例を検討する。これには，次の2点の検討がなされる。第1点が，自分なりの検討である。今から振り返ったら，「あの時は，こうしたらよかった」などなどである。

第2点が，学生仲間同士での事例の検討である。「私やったらこうする。こう思う」などなどである。ここでは，以下のような3点での学習の場面がなされる。まず第1は，自分が事例に直接的にかかわっていない学生は，5)の段階の学習をすることができる。自分が直接的に援助していない事例に対して知識の動員とその方

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

法などを学ぶのである。第2は，自分で事例を直接的に援助している学生は，自分と同じように学んでいるが直接的に事例を援助していない学生から学ぶことができる。さらに第3には，自分が直接的に援助している学生とそうでない学生の両者が，互いに自分を映し出す鏡（モデル）にして学習を進めることができる。

2章　社会福祉現場でのソーシャルワーカーになるための学習課題と過程

ここでは，上記の学習の過程を終えて，現場でソーシャルワーカーとして勤務し，ソーシャルワーカーになっていくための教育と課題について述べてみよう。

1）社会福祉現場の業務内容に関する知識と理解

ソーシャルワーカーとして勤務して3年間で習得したい学習課題である。

ここでの課題は，専門職の職業とは何かを理解するとともに，ソーシャルワーカーとしての業務内容に焦点が当てられ，自分の業務内容を全体的に大まかに知り理解するという課題である。

「ソーシャルワーカーである私」は，図8で示されるソーシャルワーカーの位置にいて，援助を展開しているのである。自分が実践する援助を通して，4つのP（Person, Problem, Place, Process）を統一的に理解し，そして自分と自分の援助などを知り理解するのである。クライエントが何者であり，クライエントの生活上の問題とは何か，そしてソーシャルワーカーが所属している機関がどのような機関なのか，私はどのような立場と役割を担っているのか，そして私はどのように機能し，機能しようとしているのかなどを知り理解することである。それも，クライエントと協同してクライエントの問題に具体的に対処することを通して業務内容を全体的に知ることである。

そしてこれは，今，ソーシャルワーカーである私がかかわっている事例と自分が大学などで学んできた知識などとを関係づけられるようになるという課題である。

したがって，ここでは，同僚のソーシャルワーカーによる管理を含むスーパービジョンのもとに業務を進めていくことになる。研修的な意味をも合わせ持ってなされる業務の遂行である。

2）社会福祉現場での実践と知識とを関係づけるなどの課題

就職してから4年目から7年目における学習課題である。

ここでの課題は，1)で業務内容の全般を理解し，そして実践を自分の有している知識と関係づけられはじめた上で，専門性を有したソーシャルワーカーになっていくための課題である。実践に志向された知識の習得であり，価値を含んだ方法や技術の修得という課題である。

これには，自分の実践と自分の有している知識とを十分に関係づけられる必要がある。今，自分が実践している業務と社会福祉にかかわる知識や価値，技術などとを関連させ関係づけ結びつける課題である。

これには，次の2つの方向で自分の実践と知識を十分に関係づけられる必要がある。

第1の関係づけの方向は，今，自分が実践していることを一般化させて社会福祉の知識や技術などと関連づけられるようにすることである。

第2の関係づけの方向は，自分の所有している一般的な知識を個々の事例に個別化して適用させる課題である。

したがって，ここでの学習の内容は，主に2点ある。第1点は，実践の場でクライエントとその問題を理解し，評価できることである。第2点は，社会資源や技法を中心とする知識，自分，所属している機関などを総合的に活用できるようになることである。

これらの諸点の学習には，＜援助実践（①）と，その実践の評価（②），その実践における自分の課題の抽出（③），学習（④），そして新たな実践（⑤）＞の一連の過程を繰り返すことによってなされる。なお，問題とその評価の枠組みは，5章で示される。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

これらの課題の習得によって，ソーシャルワーカーが所属する機関であればどのような事例でも一般的に処遇ができるようになる。

3) 自分なりの特性を生かした社会福祉実践がなされる課題

就職してから8年目から13年目までにおける課題である。

ここでの課題は，専門性を有したソーシャルワーカーが，どのような機関であっても自分の特性を活かしたソーシャルワーカーとしての業務を展開できるようになるための課題である。

そのためには，ソーシャルワーカーとしての価値観がしっかり自分の中に組み込まれて，したがって社会福祉固有の視点が自分の中に組み込まれて，クライエントやクライエントの有している生活上の問題を定めて，ソーシャルワーカーとしての自分や機関，地域などを具体的に認識し活用できる必要がある。また，問題に対処していくための援助モデルや技法なども自分のものとして修得されている必要がある。

課題の具体的な内容としては，例えば，以下の4点があげられる。第1点は，自分の特性などを熟知し，それを生かして自分なりの援助方法を展開できることである。第2点は，ケアマネージメントができるようになることである。事例などをクライエントを主人公にして統一的に全体的に理解するとともに，なおかつ事例に対する援助を全体の枠組みの中で理解し，自分の役割を主体的に遂行できることである。しかも，クライエントを援助過程の主人公にしてクライエントの主体性を第1にして，なおかつその過程が尊重されるような援助を展開できることである。さらに，事例を普遍化させて，事例の持つ問題に対処するための制度化などを行えるようになることである。第3点は，自分のソーシャルワーク実践を一般化させて，理論化する課題である。自分の実践を自分だけの事例に終わらせるのではなくて，社会福祉援助実践のモデル（地図，設計図）やアプローチなどを組み立てることである。ケースワークやグループワーク，コミュニティワークなどを相互に関連させながらソーシャルワークを展開させられることである。

これらを体験的に具体的に自分のものにしたソーシャルワーカーは，いつでもどこでも専門性をもってソーシャルワークを行うことができる。しかも，自分の特性を生かしたソーシャルワーク実践を行うことができるようになれる。

なお，そのようなソーシャルワーカーになっていくためには，ソーシャルワーク実践を蓄積するとともに，社会福祉実習生などの指導を含むスーパーバイザーなどのソーシャルワーカーを養成する役割を担うことが重要である。

3章　大学における福祉教育の課題

今，ソーシャルワーカーになっていくための過程をみてきた。このような長期的な観点に立ってソーシャルワーカーの養成を考えることによって，ソーシャルワークとソーシャルワーカー，ソーシャルワーク実践の相互の関連性も明らかになる。そして，ソーシャルワーカーになっていく長い過程における大学と社会福祉現場の役割が明らかになるし，社会福祉現場と大学との協同研究もなされるようになると思う。

例えば，社会福祉援助技術現場実習では，大学教育の中での学生にとっての実習の持つ意味と同時に，社会福祉現場や現場のソーシャルワーカーにとっての実習生を指導することの意味を検討できるようになる。

さて，次に，大学を卒業して社会福祉現場でソーシャルワーカーとして働き，なおかつソーシャルワーカーになっていくための過程を歩むために必要な大学教育の内容と課題について検討したいと思うが，今回は，特に，大学での私の幾つかの試みを中心に述べてみたいと思う。

また同時に，これによって，私のソーシャルワークに対する考え方が示されるように思う。

まず，私の目を通して見える大学教育の課題を簡単に述べてみよう。私は，今，社会福祉援助技術総論と社会福祉援助技術各論1，社会福祉援助技術演習，社会福祉援助技術現場実習などを担当している。これらの一連の科目を担当

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

していて思うことが幾つかあるが，その第1点は，それぞれの専門科目が個々バラバラに学ばれるということである。学生は，相互に関連している専門科目を相互に関連させて学んでいないということである。

第2点は，特に社会福祉援助技術演習を担当していて思うことであるが，社会福祉に関する価値や知識を十分に修得してきていないということである。そのために，社会福祉援助技術演習の講義における「自分の有している知識の活用」という学習がなされにくいのである。

第3点は，学習の段階を踏んで学習を進める必要があるが，そのような段階を十分に踏んで学習していないことである。

第4は，生活の体験が貧しいことである。生や死などを生活の中で十分に体験していないのである。

第5点は，社会福祉を学ぶ動機とも関連するが，学生自身が少なからずクライエント性をおびているので，クライエント性をおびている自分に対処する方法を学習する必要があるように思われる。これは，自己覚知に深くかかわるばかりか，「自分で自分の問題を援助することと，その方法」や「他者を援助することと，その方法」にもかかわる問題である。そして，自分を少しも回復させていない時には，専門職としての資格を有しているが，自分を回復させていないので，自分の内部が空洞化していてスポンジのようにカスカスになっている。また，自分を援助する方法を理解し知らないので，援助者として基本的な課題を抱えることになる。

4章　社会福祉援助技術総論での試み

上記の諸点を考え，社会福祉援助技術総論の講義では，まず第1にカリキュラムがどのように組み立てられているかを示すようにしている。

それを示したのが図9である。第1の縦軸には，方法論などに関する科目が並んでいる。ソーシャルワークと社会福祉政策論である。そして，ソーシャルワークにはソーシャルワークやソーシャルグループワークなどによって構成されている。第2の横軸には，社会福祉の専門分野（児童福祉論や老人福祉論，障害者福祉論）と問題(公的扶助など)，機関や施設などにおける福祉（医療福祉や司法福祉，施設福祉など）から成り立っている。今一つの第3の軸には，歴史などによって構成されている軸である。そして，これらの3つの軸の中心点に社会福祉原論が位置している。また，社会福祉概論は，3つの軸によって構成されているボックスを内容としていると言えよう。

学生は，これらの専門科目を学んでいくのではあるが，個々バラバラに学んでしまう。そこで，上記を図示して解説するとともに次の2点を述べるようにしている。

まず第1点は，社会福祉援助技術現場実習や専門演習，卒業論文などのテーマなどは，これらの3つの軸の重なる点に設定されるという指摘である。例えば，児童福祉の分野を選ぶとすると，その児童福祉の分野の中でケースワークを中心に述べるのか，それともそれらを含むソーシャルワークを中心に述べるのか，制度や政策論を論ずるのかという選択をする必要があるという説明である。カリキュラムを構成する軸を理解させ，カリキュラムの枠組みを理解させようとするものである。いわば，ジグソパズルの外枠を理解させ，そこからその中に位置付けられる個々の科目の位置付けとその内容の理解を進めていこうということである。

第2点は，社会福祉援助技術総論や社会福祉援助技術演習，社会福祉援助技術現場実習などのような学習を統合させる科目を各学年で少なくとも一つは履修するようにする必要があるという指摘である。

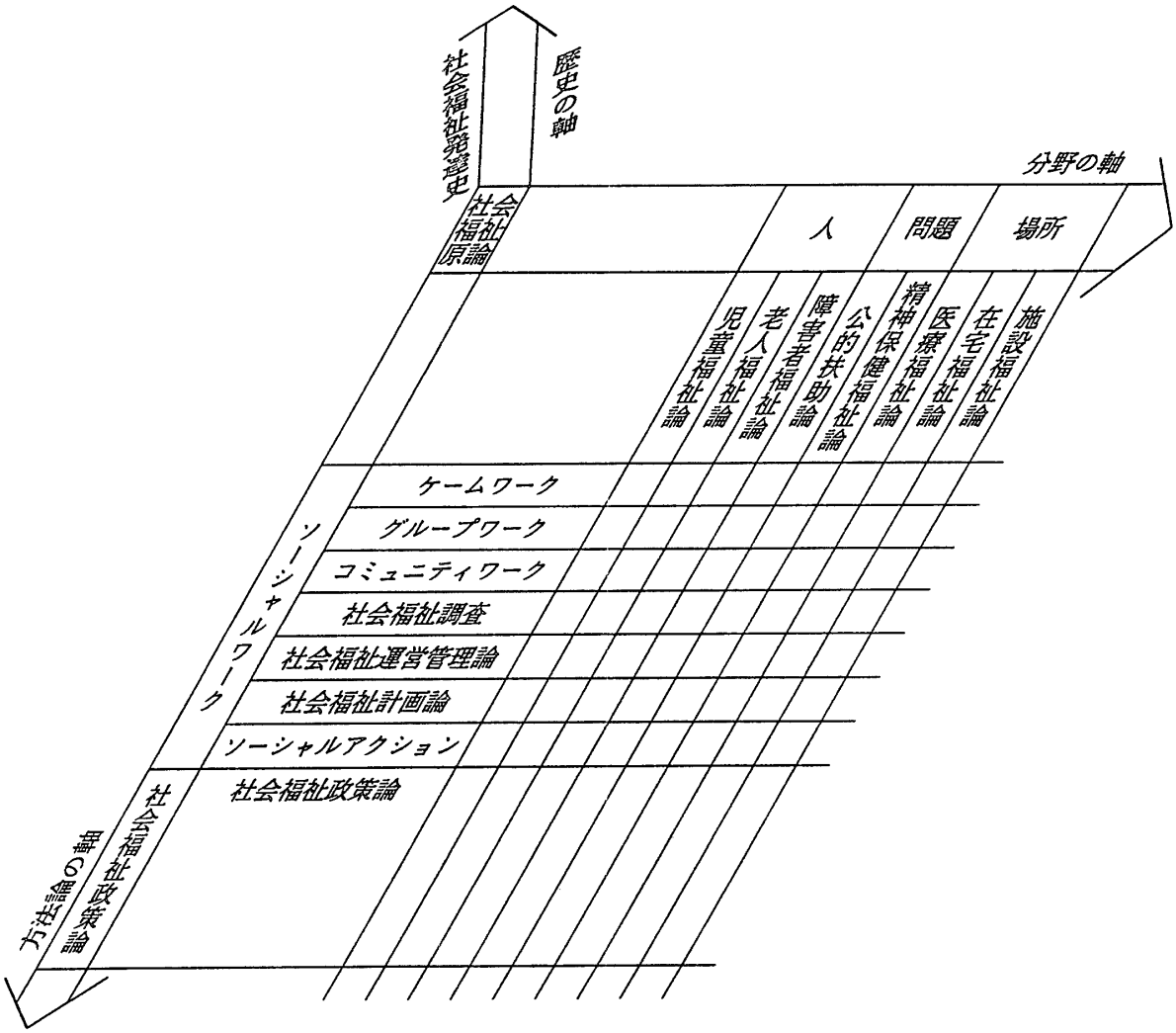
これらの指摘によって，3つの軸によって構成されているカリキュラムに求心力をつけようということである。この試みは，少しは有効である。

第2の試みは，既に示した図4の図を示し，学習していくステップを示すのである。ソーシャルワーカーになっていくための地図を示すのである。社会福祉学は実践の学であり，医師や看護婦などの職種と同じような学習の方法がな

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

図9　カリキュラムとその構成



される必要があることを述べる。例えば，医師は，解剖学や生理学などの知識を学んだ上で，メスの使い方などを学び，症例検討をし，その上で実習がなされる。社会福祉教育においても，それと同じような教育の過程がなされることを示すのである。

このように社会福祉教育の全体とその過程を示すことで，学生は次の2点を学ぶことができるようになる。まず第1点は，学生は自分が学んでいく社会福祉教育の全体の輪郭を描くことができるようになる。第2点は，今，自分が学習している専門科目をそのカリキュラム全体のボックスの中に位置付けることができるようになる。

第3の試みは，夏休みの宿題で「私の社会福祉コースなどへの進学の動機と生活（史）」をテーマとするレポートの提出を求めることである（表1）。学生からは不満の声もあがるが，また最も期待されているレポートでもある。多くの学生は，苦しみ涙を流しながらも自分と向かい合うようである。それだけ，今は，自分と向かい合い，自分を理解し，「自分が誰か」を知る機会が少なくなっているということである。

これによって，学生は以下の3点を学習するように思われる。第1点は，今述べているように自分を直視し，自己覚知を得られる点である。第2点は，自分を直視し，自分を知り，自分を援助する方法を身につけるようである。第3点は，自分を援助する方法を知ることによって「他者を援助する方法」を学ぶようである。

レポートを書いた卒業生は，次のように語る。「私は，あのレポートを書いて現場に出たおか

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

げで，クライエントと向かい合う時，第1にクライエントを信頼できたし，第2にクライエントの苦しみに共感という技法を越えて人間として共感できたし，第3にクライエントに自分を援助する方法を伝えることができたし，第4にはクライエントが自分を援助しているのを支援することができた」と言う。そして心の中で，時には言葉に出してクライエントに語ったと言う。「私も自分と一生懸命向かい合ったよ。辛くて苦しくて大変やけど，私ができたのだから，あなたもできるよ。勇気を出してがんばってよね。それも自分でできる点をできる所までがんばればいいのよ。無理をしなくてもいいよ。でも，自分を直視し，自分を知れば知るほど人生は楽しくラクになれるよ。そして，自分が自分のベストフレンドになっていくのが人生の課題だョ」。

5章　社会福祉援助技術演習での試み

ここでは，社会福祉援助技術演習の課題を踏まえた幾つかの試みを紹介しておこう。

社会福祉援助技術演習の学習課題は，習得した知識を活用できるようにすることである。例えば，一つは，面接を中心とするコミュニケーションの技能の修得であり，今一つは，「事例を読める」ようになることである。私は，特に「事例を読める」ようになれることに教育の重点を置いている。

したがって，学習の方法の1つは，「自己覚知」を課題として自分を援助する方法を学びつつ，他者（クライエント）を援助する技能を体得することである。今1つは，「事例を読む」ことを課題として事例を読み，他者（クライエ

表1　「私の社会福祉コースなどへの進学の動機と生活（史）」のレポートの課題

1　テーマ

私の社会福祉コースなどへの進学の動機と生活（史）

2　目　的

レポート作成の目的は，社会福祉コースなどへの進学の動機などを生活史的に明らかにして，今の「私と私の生活」を理解するところにある。自分を発見し，自分は誰かをみつめていただきたい。自分と向かい合い，理解し，今後の歩む道をつくり出す手掛かりになればありがたい。

これは，ソーシャルケースワーカーにとっては「自己覚知」と援助のために役立つでしょう。しかしそればかりか自分の人生を理解し，支配するために役立つでしょう。

3　内　容

社会福祉コースなどに進学した動機などをテーマに設定して，社会福祉コースなどに入学した動機と関連させて，自分の生活史を書いてください。生活の中でうまれてき社会福祉コースへの進学の動機などを書いてください

言ってみれば，これはソーシャルケースワークの社会調査である。したがって，客観的事実と，それに対する主観的な事実がいつもセットで含まれている必要がある。

4　レポート作成の方法

ソーシャルワーカーがクライエントから資料を集めるかのように自分が自分の資料を収集します。現在の時点を起点にして過去に向かいますし，未来に向かいます。また，身近な生活から始めます。そして，自分ができる範囲で自分と自分の生活をみつめていけばよいのです。

また，自分を見つめることは勇気がいることですし，苦しい，痛みを伴うものです。でも，雑巾を絞るかのように自分をつかまえて，それに言葉をつけてください。そうすれば，自分を知り，自分が自分のベストフレンドになっていく道が開かれますし（①），自分が自分を援助する方法を知れますし（②），自分が自分を援助した勇気をたたえることもできます（③）。

また，上記の自分の体験をもとにして，ソーシャルワーカーとしてクライエントと対する時に，クライエントが自分を援助して行く時の自分を直視することの苦しみに共感もできますし（①），それでも自分と向かい合うことを要求（対決）できますし（②），しかもクライエントが自分と直視できると信頼できます（③）。

5　枚数400字原稿用紙で10枚

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

ント）を援助する方法を学びつつ，自分を援助する技能を体得し，「自己覚知」を進めることである（表3と4）。例えば，第2の場合では，「事例集」の中から幾つかの事例を選び，知識を活用して事例を読み，表2の表の項目に記入していく作業を行う。知識を活用して個々の事例を個別化してストリーを読んでいくのである。資料の収集と問題の定義，評価などの作業を具体的に進めるのである。

さらに，これらの事例の幾つかの場面を選んで，その場面のロールプレイを行う。これによって，面接などにおける受容などの技能を修得するとともに，事例を深く自分と関連させて理解したり，ソーシャルワーカーが体得した技能を用いることによって事例を全く新しくし，援助を展開していく道が開かれることを学ぶことができる。それによって，ソーシャルワーカーの技術がどのような意味を持っているのかを体験できるようである。

表2　生活上の問題とその対処に関する評価項目

1.　基礎項目
①クライエントの年齢，性別
②相談者
③主　訴
④家族およびその構成

2.　生活上の問題の理解をめぐって
①生活上の問題
ソーシャルワーカーが定めた生活上の問題
②生活上の問題
ソーシャルワーカーとクライエントによって定められた生活上の問題
③関係者は，何を，なぜ，問題と考えているのか。
④問題の経過
いつ，どのように発生し，どのような経過をたどってきたのか（客観的で具体的な事実）。
⑤問題対処の経過
クライエントおよび家族，関係者は，その生活上の問題をどのように考え，どう取り組み，対処しようとしてきたのか（ⓐ）。その結果はどうであったのか(ⓑ)。それを，クライエントおよび家族，関係者はどのように評価しているのか（ⓒ）。

3.　生活者（クライエント）
①どのような人か
性格や防衛機制，自己像など
②病気（疾患）およびその状態と経過
③生活歴
結婚，教育歴，職歴，病歴など
④社会生活能力
趣味，特技，身辺処理の能力，生活を設計し管理する能力，生活感覚など
⑤問題対処能力
⑥ソーシャルワーカーや社会資源などを活用する能力

4.　家　族（ジェノグラム）
①それぞれの家族員はどのような人か
②家族の人々の生活上の問題に対する認識と態度
③クライエントと家族との関係
④家族間の相互の関係
⑤ひとつのシステムとしての家族
⑥家族のライフサイクル上の課題
家族の家族としての課題は何か。例えば，「夫婦の世界の形成」「育児」「子どもと親のそれぞれの世界の形成」「子どもの独立による夫婦の二人の世界の再形成」「一人の生活」「子どもに世話される生活」などの課題がある。

5.　生活条件（物的生活基盤）
①職業
②住居
③収入・財産

6.　精神的環境（精神的基盤，ソーシャルサポートシステム）
①友人とその関係
②同僚とその関係
③近隣とその関係
④セルフヘルプグループなどとその関係

7.　生活援助資源（生活上の問題の対処のためのあらゆる資源の動員と組織化）（エコマップ）
①人的生活資源
ボランティア，ホームヘルパー，専門職，近隣の人々
②制度的資源
生活保護制度や公費負担制度など
③ソーシャルワーカーの所属機関の資源
④ソーシャルワーカーの援助能力
面接，訪問などの援助手段，機関における位置づけ，生活資源との関係や活用能力および技能など

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

表3　社会福祉援助技術演習の学習の方法と課題

1.　学習の目的と課題

ソーシャルワークの実践においては，1+1=2 というような解答はない。人生に解答がないと同じように，解答はない。ソーシャルワーク実践においては問題を解いていく方法と過程がきわめて重要である。

自分の知識などを動員して問題に取り組むことが重要なのである。いろいろ間違って，知っていけば良いのである。自分なりに理解しようとして，創造性と想像性を発揮すれば良いのである。「ああそうやったのか」と自分で自分なりに理解し，悟れるようにしよう。

さて，ここでは，事例に対する見方，考え方，読み方などを学びます。幾つかの事例を材料にして，読む力を養います。繰り返しますが，ここでは，読む力をつけるのが目的です。そのための材料が事例です。知識を得ることではありません。

ここでは以下のような3点の学習をします。

1)　事例（ストリー）を読む方法の習得
2)　事例の検討の形式・方法
3)　面接技術の習得

2.　学習の形式と方法

1)　それぞれの班ごとの担当によって事例を検討する。
2)　事例の提出者と司会者，記録者を決める。
3)　事例の提出者は，自分がこの事例を担当しているソーシャルワーカーを演じる。
4)　司会者は，事例の提出者の意図と目的を理解し，その目的に焦点を当てて討議できるようにする。
5)　記録者は，論点などを中心として記録し，次回に配布し，説明する。
6)　参加者は，報告者と同じ用に事例を十分に理解しておく。
7)　その上で，グループで考えて，グループとしての意見や考えを持つようにする。自分たちの意見にする。グループの意見にしていくことが，していく過程が大切である。

3.　事例の提出者の役割

既に述べているように，報告者は，事例の提出者である。創造性と想像性を発揮して，「教科書の事例」に沿いつつも，自分の事例にしてください。したがって，事例に関する事実の確認などの質問にも答える必要があります。

A）事例を提出する目的
B）生活上の問題とその対処に関する評価項目
C）事例
1)　事例の概要（資料の収集と整理）
2)　クライエントは誰れ
3)　主訴は
4)　クライエントの生活上の問題（問題の定義）は
5)　処遇の方針（短期的な目標と長期的な目標の設定）は
6)　処遇は
7)　処遇の評価（クライエントとその問題に対する処遇の検討）
D）事例で検討し，討議してほしい諸点

4.　司会者の役割

司会者は，事例の報告者と同じように，事例の全体像を理解しておく必要があります。そして，司会を進める順序は以下のようにします。

1)　事例の提出者の報告（報告者）
2)　語句などの質問（全員が質問し，報告者が答える）
3)　資料などの事実の確認（全員で，班単位で）
4)　問題点などの検討（班単位で，全員で）

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

5) 処遇の方針の検討（班単位で，全員で）
6) 処遇の方法の検討（班単位で，全員で）
7) 報告者の検討してもらった結果に関する感想（報告者）

◇班単位の見解
班単位で，ということは，班で検討して，班の意見を述べるのであって，班のあるメンバーの意見ではありません。したがって，班で十分に討論し，班の意見をまとめてください。
◇質問
事例を読もうとして出て来た疑問点を質問する。事例を分かろうとして疑問が出てきたということは，事例を読めるようになってきているということである。その疑問を解いていくことで，事例がさらにわかるようになる。したがって，事例に対する質問は，「そのメンバーが事例をどのようにどの程度理解しているのか」を示している。

5. ロールプレイ
幾つかの事例に関しては，事例のクライエントやソーシャルワーカーなどの人物の役割を演じてもらう（ロールプレイ）。クライエントや家族の立場や置かれた状況，気持ちを感じて，気持ちを推しはかって，その人物に成り切って演じてみたい。

表4　事例を読むための学習の手引き

1. 事例を読むとは
今，私たちは，事例を読む方法（①）と，事例の検討の方法（②）を学習しようとしている。
「事例を読む」とは，クライエントと問題，そしてそれを巡る人々のストリーを読むことである。
それには，自分の持っている知識を個別化・具体化・現実化していく作業を必要とする。普遍的な知識を動員して「この場合はどうか」「この事例ではどうか」などと具体的に見ていく作業をするのである。
例えば，ケースワークで習った資料の収集や評価，処遇などに関する知識を具体的に個別的にみていくのである。私たちは地図（モデルなど）という知識をもっている。その地図を，今歩いている現地（事例）に適用させていくのである。ここの現地は，どのように読み取ることができるのかという具合である。
また，事例を検討する方法は，司会をすることによって学ぶことができる。

2. 事例を読む方法の習得
これらの習得には，自分で感じて，主体的に考えて，事例をわかろうとする必要がある。
第1は，試行錯誤しながら分かろうとすることである。第2は，事例を読み誤ることである。第3では，「これはどういうことやろ。どういう意味やろ」と疑問を持てるようになることである。第4は，「こういうことではないか」と想像し創造できるようになることである。第5は，その上で，自分なりに分かったことをグループで突き合わせ，グループで共有するのである。
これらのことによって，事例が読めるようになり，社会福祉の価値（観）とそれに基づく考え方と方法をわかるのである。それも急にわかり，急にできるようになる。ある日，「ああーそうか」と突然にわかる。10回に1回わかり，そして10回に5回わかるようになるという具合に理解は進む。「悟れる」のである。そして，一度わかれば，世界が新しく見えて来て，全てがわかるようになる。どんな事例であっても理解できて，問題を定められ，処遇方針が立てられる。

3. 事例を読むための具体的な手立て
多様な問題が，人やものとの関係を歪め，関係を失わせる。そして，それらの緊張や対立関係が新たな問題を生む。それらの結果が原因となり，さらに新たな結果を生むという具合に時間の経過とともに，多様な問題が複雑にからみあって生活上の問題がダンゴのように形成される。
そのような事例を読めるようになるには，以下の諸点が手掛かりになる。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

1) 事例の核心とは何かを分かるようにする
①問題は何で
②どのように形成され
③どのように人々を巻き込み，広がっているのか
2) クライエントとクライエントの問題に絡み合う人々と，それらの関係をわかるようにする。
①クライエントを中心とする登場人物は，どのような人々か
②そのような人々はどのような状況にいるのか
③そこで，どのような思いで生きているのか
④登場人物の人々同士の人間関係はどうなっているのか
3) そのためには，以下のような問いを自分に発する。
①この人のこの言葉は何を意味しているのか。何を言わんとしているのかを考える。
②この問題は，何を語っているのか。また，人々にどのような問題をもたらしているのか。
③どうして，こんなことをするのか。何が，原因なのか。そしてそれらは，何を物語っているのか，などなどである。
4) その人の立場（クライエントやソーシャルワーカーなど）に身を置いてみる。もし，私がその人の立場であれば，どのように感じたり，どのように受け止めたり，どのようにしたであろうかと考える。

なお，ソーシャルワーカーが，面接でクライエントに質問したり確認するのは，それが大切だからである。クライエントが問題に対処して，生きていくことにとって大切であると考えて質問するのである。

それと同じように，事例の検討における疑問点や事実の確認などは，問題を定めたり，事例のストリーを理解する要（カナメ）である。事例を理解していないと質問はできないし，質問は，その人がどのように理解しているかを示している。

4. 私を含めて事例はみんな共通

事例は，事例としてみんな異なっているが，またみんな一緒である。しかも，その事例とは，私たちを含めた事例である。私が私を自己実現したり，私が私の生活を実現することと，障害のある人々や老人，児童の人々が自己と自己の生活を実現することとは，一緒なのである。

したがって，事例を検討できるようになれば，自分の人生を理解して，自分と人々を理解できるようになる。「私って何，社会って何」に答えられるだけではなくて，「私は誰れ」にも答えられるようになる。

自己覚知を深めることによって，自分が自分のベストフレンドになれ，人生を生きやすくさせる。自尊心をもてる。そして，またそれらのことによって援助者としても高められる。

また，逆に言えば，自分が自分を援助して，自分という事例を理解できるようになれば，さまざまな事例をも理解できるようになる。

6章　社会福祉援助技術現場実習での試み

学生は，3年生で社会福祉援助技術演習を履修し，それと同時に3年生と4年生で「社会福祉援助技術現場実習」を履修する。主に，4年生の夏休みに社会福祉現場で「社会福祉援助技術現場実習」を行う。したがって，学生は，知識と価値，技術を習得し，「事前実習」での教育を受けて，最後に，社会福祉現場に出向いて社会福祉実践を試みる「実践実習」を体験し，自分の実践実習を評価し，社会福祉教育を終えるのである。

ここでは，「社会福祉援助技術現場実習」における「事前実習」での教育を中心に述べることにしよう。

まず第1の学生の課題は，「実習計画書」の作成である。

学生（図1のように示される「私」を含んだソーシャルワーカー）は，実習で何を学び，どのような実習を希望するかなどを具体的に明らかにする作業に取り組むように要求される。図

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

表5　社会福祉援助技術現場実習の計画書の作成のために

＜社会福祉援助技術現場実習の計画書の作成＞

社会福祉援助技術現場実習の計画書の作成においては，まず自分の社会福祉援助技術現場実習に対する「こだわり」を明らかにしておくことである。自分と自分のこだわりを明らかにし，しっかりとつかまえておくと，皆と一緒になって意見を交換した時，例えれば，自分がミキサーにかけられた時となるが，「私」が「私」でいられる。「皆と一緒」になっても自分を失うことがない。

「私」が定まり，私が内側から「はじける（発酵）」条件を整えた時には，その「私」に基づいて実習の動機や目的を定められる。そして，それがなされるように実習の計画を立てる。ちょうど，クライエントが自分の問題を定め，評価するかのように「自分に関する処遇計画」を立てる。自分を一人前のソーシャルワーカーにしていくための処遇計画を立てる。自分が自分を援助するのである。

次は，それを課題として実習指導の教員および実習現場の先生と突き合わせて進めていくという過程を辿ればよい。

なお，実習の計画書は，焦点を定め，具体的で，「領域と分野」を限定し，なおかつ現実性をもたせるようにする。

以下は，実習計画書の作成のための具体例と説明である。

「実習計画書」

1.　テーマ（具体例）

『ソーシャルワークにおける個別援助技術の習得を中心とする実習（特に，児童虐待の問題に対する接近の方法と援助）』

2.　動機（説明）

ここでは，ソーシャルワーカーになろうとした動機（①）や，その分野（児童や障害，老人）や領域（ケースワークや連携など）に関心をもった動機（②），そして，そのような実習のテーマを設定した動機（③）などを記す。

3.　目的（具体例）

実習のテーマに基づいて実習の目的を定める。例えば，以下のようなことがある。

①面接技術の修得
②個別援助技術が現場でどのように実施され，どのような有効性をもっているのかなどを理解する。
③今後の学習課題の明確化
④将来，ソーシャルワーカーとしてやっていけるかどうかを自分なりに確認する。

4.　それを修得するための具体的な課題（具体例）

①コミュニケーションの技法
②受容などの技法などの習得
③クライエントとその置かれた生活状況に関する理解を具体的に個別的に進める。
④クライエントの気持ちを感じられるようにする。
⑤チームの中でのソーシャルワーカーの個別援助の機能や役割を具体的に理解する。

5.　上上の課題を実現させるための実習のプログラム（希望の具体例）

①面接の記録を読ませてもらう。
②クライエントや家族，関係者などとの同席面接（機関内で，あるいは機関外で）をさせてもらう。
③同席面接をして面接の仕方と記録の書き方を学びたい。
④面接を試みてみたい。
⑤そして，それに関する評価を受けたい。
⑥グループ活動などにおける個人の理解を深めるためのグループ活動に参加したい。
⑦処遇会議や連絡会議に参加し，それぞれの職種の役割とチームワークを理解したい。

6.　実習前の学習課題（説明と具体例）

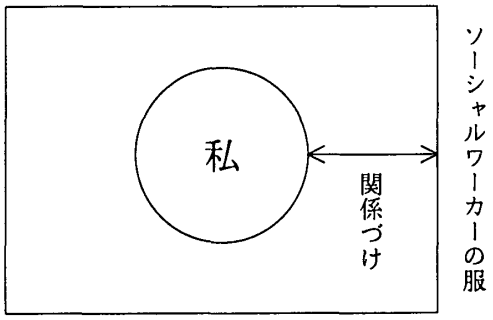
以下は，今回の実習に先立って事前に学習したあるいはこれから学習しようとしている諸点です。

①機関に関する知識を深める。
②児童の問題，特に児童虐待に関する知識を深める。
③個別援助の過程などを再度復習し，知識を修得しておくようにする。
④受容の技法などのコミュニケーションの技法の理解を深めておくようにする。
⑤児童虐待の現状などに関する報告書などを読んでおく。
⑥児童虐待の事例を読み，クライエントとその置かれた生活状況についての理解を進めておく。
⑦虐待児童や親などの体験記などを読んでおく。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

図10　ソーシャルワーカー



1で言えば，図1になろうとしているAさんが，図1のようになるための課題を示し，図1になるための実習のプログラムを作成するのである。

特に，ここでは，図10に示されるように，「私」と「私」がなろうとしている「ソーシャルワーカー」との相互交流を促進させて，私とソーシャルワーカーとの関係を具体的に明らかにさせるように教える。具体的には，例えば，私がソーシャルワーカーになろうとする動機などを深め明らかにすることである（表5）。

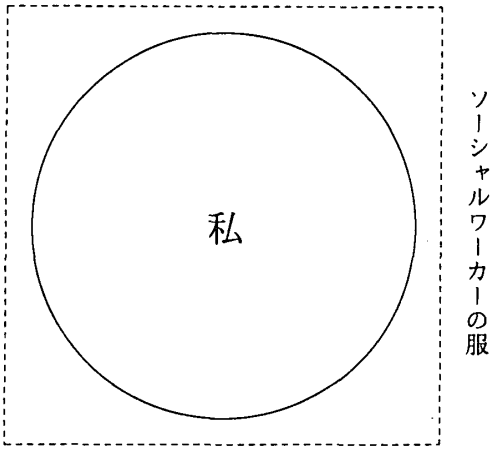
第2は，社会福祉学が実践の科学であることを強調し，社会福祉援助技術各論などで学び，修得した基本的な知識を発展させ応用できるための学習を行う。社会福祉に関する知識を社会福祉現場で個別に具体的に活用できるように，創造性や想像性を養おうということである。

例えば，図1の図を描き，その図を説明し，「これを基本形にして，それでは『ボランティア』や『医師』などの場合では，どのような図が描かれるのか」などと，学生に問うのである（図2，3）。また，同じソーシャルワーカーであっても，『社会福祉施設のソーシャルワーカーでは？』『児童相談所などのソーシャルワーカーでは？』などと問い，それらを図示するように要求するのである（図11，12）。

また，図8で図示された図を基本形にして，「それでは，グループワークやコミュニティワークの場合には，どのように図示できるか」「『患者と医師』『学生と教師』の場合には，どのように図示できるか」などと問い，要求するのである（図13—15）。

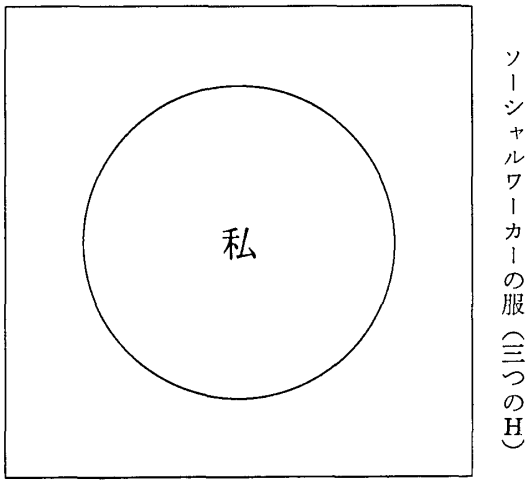
このような事前学習によって，実習の場面を

図11　社会福祉施設のソーシャルワーカー



人間を中心とする生活者としての私が大きな比重を占め，私を資源として活用する。したがって，外からは，専門職としての私と，専門職の服を脱いだ私的な私が場面によって登場してくるようにみえる。

図12　機関のソーシャルワーカー



イメージできる能力を養い，実際の社会福祉現場での実践実習を想定してロールプレイなどを実施し，実践実習での学習に備えるのである。

なお，既に図示した図6は，実習生の位置を示すために学生に図示するように要求している図でもある。この図6と図5を一体化させた図が図16である。図16は，またも「自分を援助することと，その方法」と「クライエントなどの他者を援助することと，その方法」の両者を体験し学ぶことができる「社会福祉援助技術現場実習」における実習生の位置を示している。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

7章　ソーシャルワーカーになるための課題と方法

既に幾度か「自分を援助する方法」と「クライエントを援助する方法」とが相互に関連していると述べてきた。

最後に，この点に焦点づけてソーシャルワーカーになっていくための課題と方法を述べてまとめとする。

1）回復者が有給の職員になるための課題

最近，自分自身で自分の回復の努力を続けている障害などを有する回復者（Self-Helper. セルフヘルパー）が有給の職員となり，自分と同じ仲間の障害をもっている人々を援助していることが多くなっている。精神病院などの医療機関で職員として勤務している場合もあれば，自立生活センターや共同作業所，MAC(Melinohl Alcohol Center）や DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center）などで仲間の回復を援助している場合もある[4]。

セルフヘルパーの人たちは，以下のように援助を展開している。自分の個人的な体験を経験化し，普遍化し，自分の個人的な回復体験を基にして仲間を援助している。自分の個人的な体験を語り，仲間を内的に理解し，仲間の回復過程に参加している。したがって，ここでの課題は，図17のように，自分の個人的な体験を経験化し深め広げていくことである。自分の体験を深め広げることによって内的に分かり合える幅を広げられ，仲間になれ，仲間を援助することができるようになる。仲間の個人的な体験と出会い重なりあえることができるのである。そしてまた，仲間の体験を自分に関係づけて聴き，自分の中に入れ込み，栄養とし，自分の回復を推進し，自分の体験と自分を広め深められるのである（図18)。

図13　医療における患者と医師の治療を構成する要素<主に，慢性疾患などの場合>

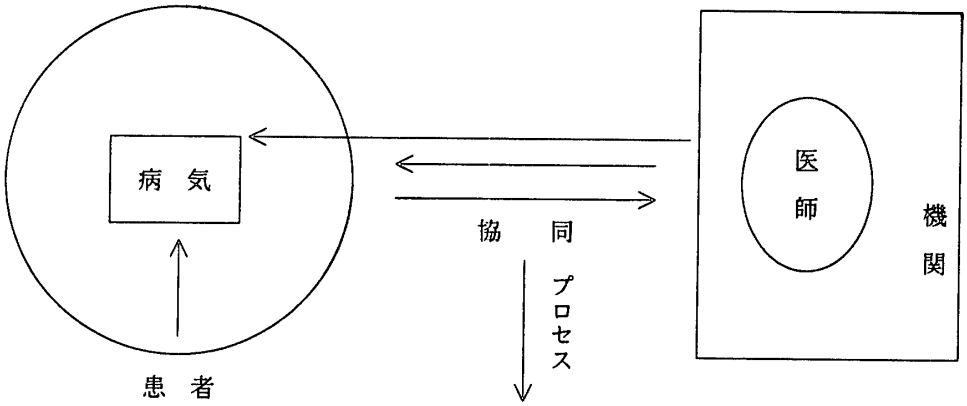
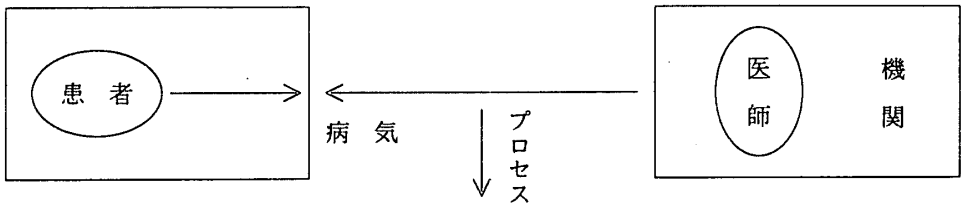


図14　医療における患者と医師の治療を構成する要素<主に，急性疾患の場合>

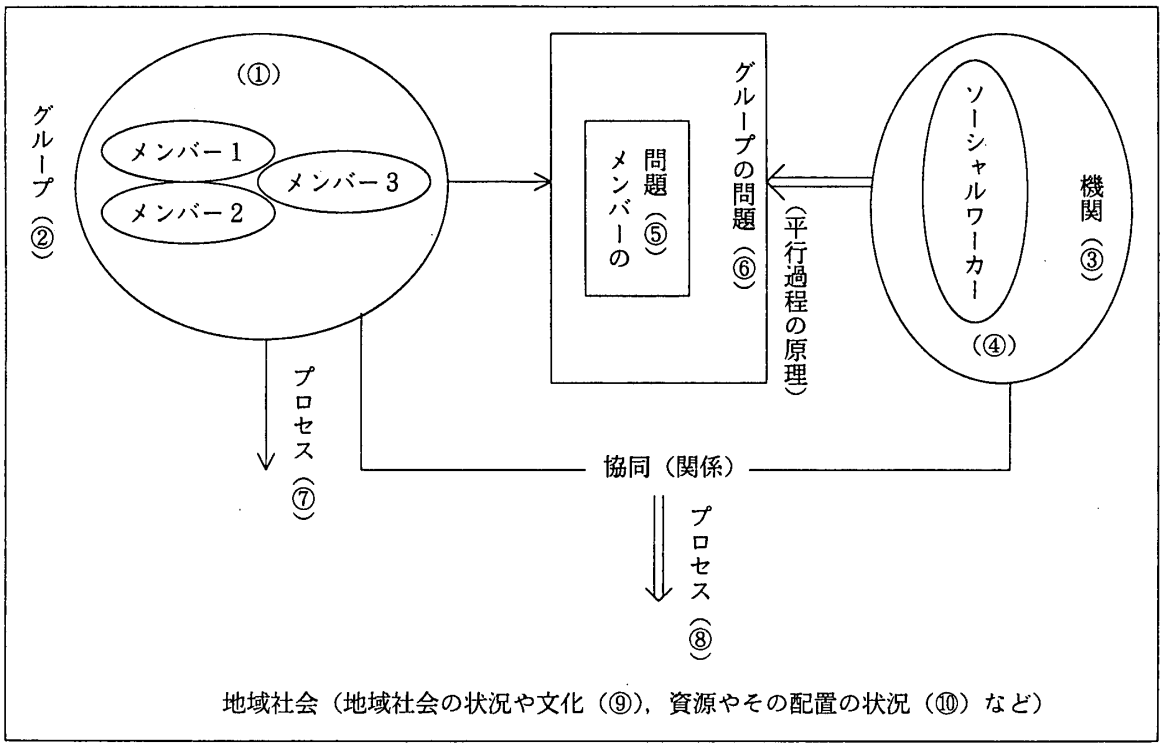


4）岩田泰夫『セルフヘルプ運動とソーシャルワーク実践』やどかり出版，1994年。

NII-Electronic Library Service

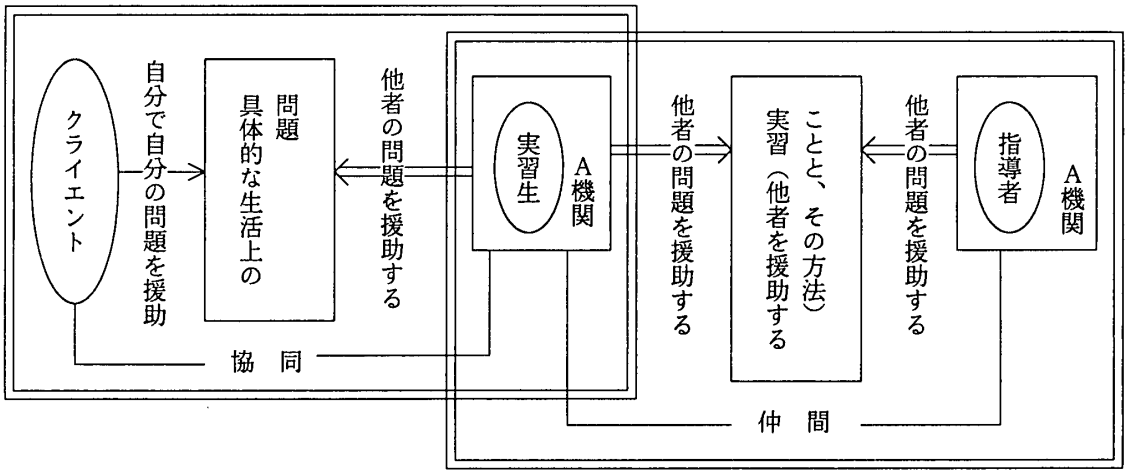
Momoyama Gakuin University

図15　グループワークの構成要素



グループワークは，上記のように10の構成要素によって構成されている。なお，この図15は，W.シュワルツの交互作用モデルのグループワークの理論モデルを主に指している。

図16　図5と図6を一体化させた図



言わば，自転車の乗り方の技能を体得した経験をもとにして自分と同じ道を歩む仲間の自転車の乗り方の体得を援助するという課題である。

したがって，セルフヘルパーに対する研修は，セルフヘルパーの個人的な体験を広げ深められるようにすることである。例えば，仲間の体験と自分の体験を関係付けられるようにトレーニングしたり支援することである。

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

図17　体験の経験化の深化と拡大（斜線は重なっている部分を示している）

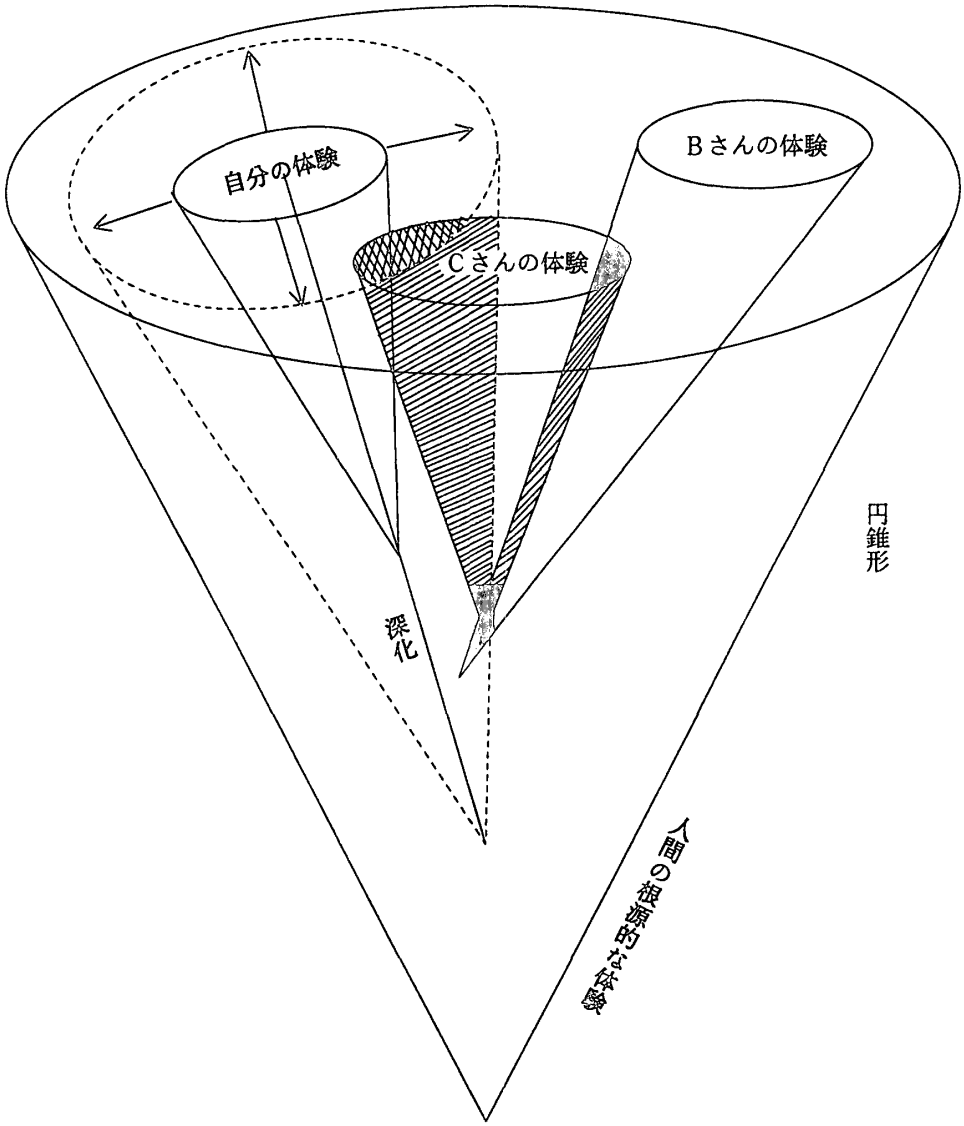
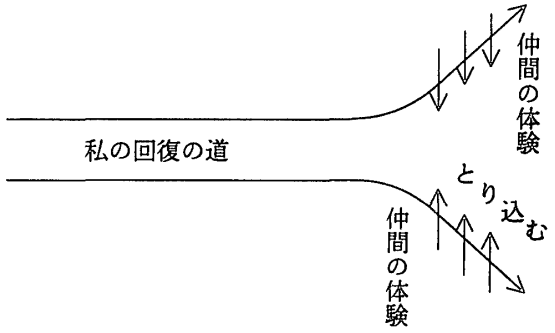


図18　仲間の体験を「栄養」にし，回復の道を広げる



2）　ソーシャルワーカーになるための課題

それに対して，ソーシャルワーカーがソーシャルワーカーになるためには，次の２つの課題がある。

第１点は，自分を援助することである。自分自身への援助を続けて，自分と自分を援助する方法を個別化し援助方法を習得することである。

自分の体験を経験化し，自分の人間としての生活（者）の回復をはかり，回復の道を広げることである。私が私を援助して，私が具体的にどのように回復していくのかを個別的に体験し，認識することである。

第２点は，第１点とともに，普遍的で体系的な知識を個別的に活用することである。ソーシャルワーカーとしての私が習得した普遍的な知識を個々の事例に個別的に活用することである。ソーシャルワーカーとして習得した知識に自分の個人的な経験を付け加え，個々の事例に個別

NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

性と現実性と具体性を持たせて援助するという課題である。

なお，それがなされるためには，次の２点が必要である。まず第１点は，実践経験を積み重ねるとともに，普遍的で体系的な知識と自分の個別的な体験を関連させる必要がある。第２点は，普遍的な知識を個々の援助に適応させる能力である。それらを図示したのが図19と図20である。普遍化のボックスの中に個別化された具体的な経験を織り込み普遍的な知識の枠組み（ボックス）を自分のものにするということである。

今までの例えに習えば，自転車の乗り方に関する知識を個別的に具体的に実際的に活用して他者の自転車の乗り方の体得を援助する課題であると言えよう。

3） 両者の課題の異同

1)と2)を図式化したのが図21である。この図をみれば，セルフヘルパーと専門職の両者の課題が，ともに「知識」の個別化と一般化であることがわかる。

しかしながら，セルフヘルパーの場合には，自分の個別的な体験をもとにして援助を展開していくがゆえに，自分の個別的な体験を如何に一般化させないで広げていくかが課題となる。

それに対して，専門職の場合には，大学などで普遍化された知識を学び，その知識に基づいて援助を展開するがゆえに，それらの普遍化された知識を個々の具体的な事例に個別化させて現実的に適用していくことが課題となる。

大まかに言えば，専門職の場合は，知識を個別化させて用いるという課題であり，セルフヘルパーの場合には，体験的な知識を豊かに広げて用いるという課題である。

おわりに

今，私の個人的な体験を述べ，またその個人的な経験を基にしてソーシャルワーカーになっていく過程と課題を述べた。そして，ソーシャルワーカーになっていくには，以下の３点の課題が重要であると述べた。第１点は，幾つかの段階を順番に歩んでいく必要があるという点である。第２点は，「自分が自分を援助すること」と「他者であるクライエントを専門職として援助していくこと」の両者の経験が必要であるという点である。第３点は，しかも「自分が自分を援助すること」と「他者であるクライエントを専門職として援助していくこと」を相互に関

図19　私の回復体験とソーシャルワーク

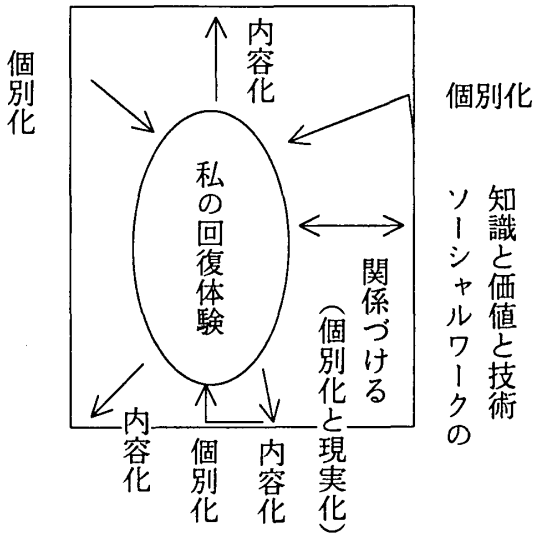
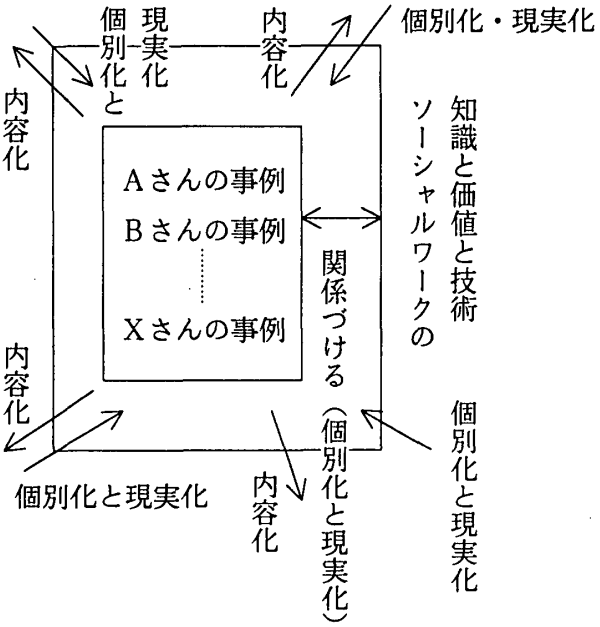


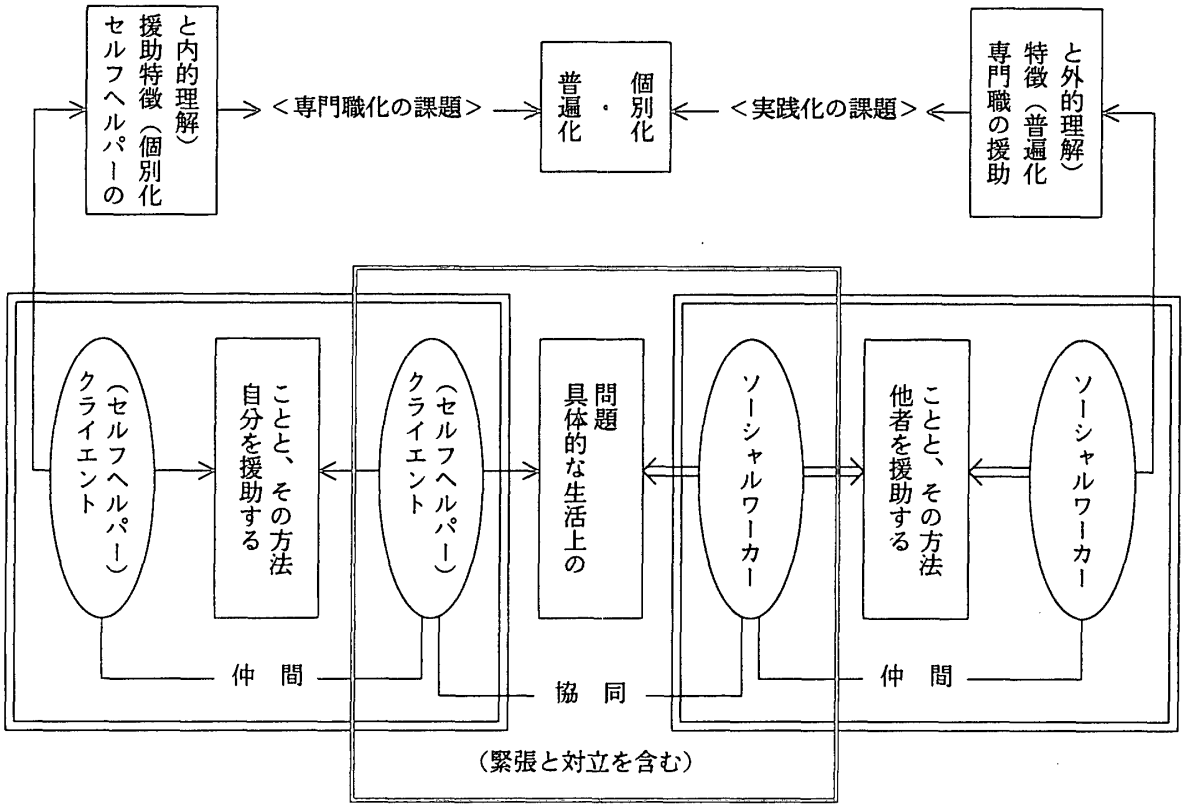
図20　ソーシャルワークの個別化と現実化（内容化）



NII-Electronic Library Service

Momoyama Gakuin University

図21　セルフヘルパーの専門職化の課題とソーシャルワーカーの実践化の課題



係づけて一体化させる必要があるという点である。

また，ここでは十分にふれることができなかったが，社会福祉援助技術現場実習もそうした観点をも含めて総合的に検討する必要があるように思う。

私の経験から言えば，実習生を指導する経験は，ソーシャルワーカーになっていく過程にとってきわめて重要な意味をもっている。実習生をスーパーバイズして，実習生を鏡にして自分や自分の援助の方法を知る。さらに自分の実践を意識化し言語化できるようになる。まさに実習生（他者）を援助して自分が援助されるのである。「Helping You Helps Me」。これまた，長く豊かな体験に基づいて生みだされてきたセルフヘルパーの語録のひとつである。

最後に，当研究ノートの一部（主に7章）が文部省科学研究補助金による研究の成果であることを明記し，お礼申しあげる。

NII-Electronic Library Service